

日本人にとって
宗教とは何か

二十一世紀、日本人は 「宗教」という 価値観に直面する

橋爪大三郎

(東京工業大学大学院社会理工学研究科教授・社会学者)

日本人だけが理解しえない 宗教の力量

二十一世紀という時代は、どのような方向に向かっていくのか。

第一に、宗教が、二十一世紀にますます重要になってくるであろう。そう主張する日本の知識人も多い。しかし、宗教が日本人に理解されるのは難しい。その理由は、宗教の持つ意味合いが、日本と

それ以外の社会では全然違うからだ。どのように違うかを説明するには、宗教の定義を考えなければならない。

私は私なりに宗教を定義して、「宗教とは、必ずしも自明でない前提に基づいて行動する一群の人びとの活動の全体」と考えている。

この結果、「仲間である自分たちと、仲間でない他者たちを、明晰に切り分ける方法」という、宗教の重要な機能もみ

ちびかれる。

コンピュータに例えれば、宗教は基本OSのようなもの。「人びとが共通の価値観や事実認識を分け持つて、社会を組織するための前提となるもの」としても、機能している。

しかし、今日の文脈では、また別の観点から宗教をみていくことができるだろう。社会・国家・宗教の関係のなかでの宗教、ということだ。

どんな場所でも社会は、「非常に小さく、自然環境に密着して、親族など血のつながった人たちとのネットワークからできているローカルな文化」という形で出発する。

文明が発達するに従い、ローカルで小さな社会はお互いに関係し、もっと広い範囲の人たちとつながるようになる。

その遠く離れた無関係な人たちをくっつける接着剤としてどのようなものがあるのかを考えると、大きな意味で二つある。ひとつは国家、すなわち政治的統合だ。広い範囲で政権をつくり、税金を徴収する。内部の人たちはバラバラだとしても、国家の成員として、つまりその政治的統合体の構成員として、平等に結びつけていく、政治という接着剤がある。

もうひとつの接着剤は、宗教だ。これはもともとあったローカルな風俗や習慣を組み替えて、もっと抽象的で、一般的で、自然環境と無関係で、統一的な法律

や文化を生み出し、新しいフォーマットで大勢の人びとを統合していく。

このように、国家と宗教という二つの接着剤があるのだが、宗教という接着剤はしばしば国家、政治的統合という接着剤よりも強方だ。

国家の場合、イスラム圏ならイスラム圏の中に、キリスト教圏ならキリスト教圏の中に、一つの宗教圏の中にたくさん国ができる。中国なら中国に儒教という一つの枠組みがあっても、その中に複数の国ができることは十分に可能だ。しかし、宗教の力によって政治的国家が制限されたり、打ち倒されたりすることは極めてよくある。もちろん逆に、宗教が政治的権力によって打ち倒されてしまうこともあるし、これが一致してしまう場合もある。

この三つのパターンの関係は非常にダイナミックで、流動的で、緊張を孕んだものだというのが世界の常識だ。

ポスト冷戦の現在、国際関係が非常に混乱しているが、アメリカの一極集中に対する異議が支持される場合、それ、人びとは予感している。これは、過去数千年の文明史から見ると、極めて当然のこととて、この危機を世界中の人びとはよく理解できている。

ところが、日本人だけが理解できない。ここが、日本人が宗教の重要性を理解し得ない、理解しにくい一番のポイントです。

なぜ日本人だけが理解できないのかは、日本における宗教と国家の関係を考えてみればわかる。

日本は、日本という政治的まとまり(すなわち国家)が、宗教によって脅かされたという経験がない。むしろ逆に、国家が常に宗教を手なづけ、コントロールして、政治的な支配の手段として使ってきたという伝統がある。

だから、宗教と政治を比べてみたら、

政治が強いのは当たり前だと思ってしまう。宗教を信じ込む人たちは政治的なマインオリティになって弾圧されたり、殺されたりしても当然だという意識があるし、宗教に巻き込まれることは危ないし、また「苦しいときの神頼み」という常識がある。

いくつか例を挙げましょう。

まず仏教。日本において仏教は最終的に国家が完全にコントロールするというかたちになった。

神道は、もともとあつた信仰で、日本国成立に重要な役割を果たしたイデオロギーだが、その後、国家に反抗することはなく、むしろ統治の手段として儀式化してしまった。

中国起源の儒教は、日本の国家を超えたイデオロギーであり、観念体系だが、この儒教が日本の国家を危険に陥れたということとはなかった。例えば、吉田松陰の『講孟節記』という孟子についての注

釈書があるが、最初に書いてある問答が非常に面白い。「もしも孔子と孟子が中国の軍勢を率いて日本を儒教化するため戦争を仕掛けてきたら、お前たちはどうするか？」

この問いに対し、吉田松陰は「日本を守るためその軍勢と戦って、孔子、孟子を討ち取れ」と答えている。つまり、ナショナリズムのほうが儒教の普遍性よりも強いのである。

明治維新はこのようにできあがった強烈なナショナリズムなので、儒教の精神を一部、神道の精神を一部下敷きにしていても、そのイデオロギーは日本の国家の政治的統一を脅かすものではなかった。日本国の存在は、ずっと自明のものだったからだ。日本。日本人にとってこれほど強烈なイデオロギーはない。宗教はこれに対抗する力を持ちえなかった。

唯一、二十世紀にインパクトを与えたものはマルクス主義だ。

それが宗教の恐ろしさでもあり、本当の宗教の力量なのだ。日本人はこの宗教の力量というのを知らない。

宗教だけが解決できる

旧大陸と新大陸の非合理

十九世紀、二十世紀、二十一世紀を概観してみよう。

十九世紀、フランス革命以後の世界は「国家の時代」となった。国家は完全に世俗的のものとなり、宗教とは切り離された。これは、アメリカにしても、フランスにしても、イギリスにしても、概ねヨーロッパ諸国はこのような経過をたどった。

世俗の国家は、市場経済を抱え込み、産業革命、自由貿易の考え方で世界に拡張し、覇権を求めていく。

最初は、ヨーロッパの世俗国家が軍事力や産業で出遅ているローカルな国々を

植民地化する。古代の文明地帯、中国やインドや東南アジアやアメリカ大陸などがその対象となる。そして行き着くところ、世俗的国家が複数集まり、パワーズ（列強）を形成する。集まったパワーズが弱いものを攻撃し、勝ち組に残るといってゲームになる。それはいきおい戦争にならざるをえない。第一次世界大戦はその総決算だった。その結果、もう一回復讐戦があつて、第二次世界大戦が起こり、そのあとで米ソの冷戦になった。そして、アメリカの一国支配に帰着した。

このアメリカの支配が、二十世紀の後半から二十一世紀にかけて確立したのはなぜか。

これは「旧大陸・新大陸問題」と言えるのではないかと思います。

古代文明はおおむね、旧大陸の大河の流域で発達した。しかし、そこが科学技術・産業文明を生むかという点、そうで

マルクス主義は宗教ではないが、政治的国家よりも上位の世界普遍思想である。最終的には、国家の死滅を唱えている。しかし、そのマルクス主義にしても、結局のところは、日本国家を打倒して世界ソビエト連邦の一員になるということにはならなかった。国際連帯を主張する赤軍派もあつたが、非常に例外的な存在だ。多くの新左翼過激派にしても同じことが言えるが、みんな日本内部での集団である。天皇制に反対するところが曖昧なのは、要するに日本化しているということだ。

こういう具合で、今に至るまで、世界の規模の宗教を信じる日本人が増えたり、「自分たちは日本人ではなく、世界人類共同体の一員だ。こんなところに日本という国があるのが間違いだ」という考えかたが出てくることは全くない。

しかし、今、世界中のいたるところでこれに類する考え方が生まれている。これはない。古代は古代で頂点を迎えた後、そこで宗教を生み出し、国家を生み出す。その後、宗教は周辺地帯へ広がり、国家の方は解体するという状況になつていった。

そして次に、森林地帯に文明が浸透していく時期があり、中世という時代を迎える。中世は、政治的国家よりも宗教のほうが優位な時代であり、その周辺地帯で科学技術・産業文明が生まれてくる。これらは、古代・中世の遺産を活用する形でしか生まれないので、旧大陸の中で発生することになる。科学技術・産業文明が生まれた途端にその世界支配が起こり、人・商品・科学技術が移動する。

アメリカは、産業文明を起こした中心にいた人びとが、科学技術と知識と勤労のモラルをもつて移動し、新しい植民地としてつくりあげたもの。ここで、新大陸が旧大陸から地理的に十分離れているというところが重要です。近かつた場合

は、とつづくに旧大陸になつてゐる。このような新大陸はいくつかあつたが、特に北アメリカは適度に広くて資源が多かつた。資源が多い新大陸に植民者が足を踏み入れるのだが、古代や中世では偶然たどりついたとしても何も起こらない。しかし、近代になつてあるタイプの人たちが新大陸へ行くと、猛烈な勢いで高度成長し、産業国家をつくりうる。これがアメリカです。その成長は、旧大陸が産業化するスピードを上回る。二十世紀を通じて、アメリカは旧大陸を凌駕していく強さを生み出してきた。

もう一つ重要な点は、旧大陸はさまざまな宗教、文化伝統、人種や民族を抱えてこんでいるために、統一ができないということ。東ヨーロッパと西ヨーロッパは統一ができない。中近東とヨーロッパは統一ができない。インドと中国は統一ができない。ロシアと中国は統一ができない。日本とロシアと中国は統一ができない。

いま、アメリカ一國主義というのが起こつてゐます。このアメリカ一國主義の根拠を考えると、資源が限られてゐる中で、アメリカは多くの資源を支配している、資本や技術や知識が限られてゐる中で、アメリカはその大部分を支配している。それを軍事力にして、軍事力に関して旧世界のどの国であつても、または東になつても対抗できない。こういう状態です。世界秩序はこうして維持されているのだから、これはアメリカの個別利害、国益とも合致している。アメリカは国益を守るために世界の秩序を維持するという状態なのだ。

これは考えてみると、アメリカ以外の国にとつて大きな矛盾となる。

ヨーロッパや日本など、アメリカに匹敵する旧大陸の先進国は、アメリカに協力することによってほぼ同じような利益を得ることができから、アメリカに協力すること以外の選択肢はたぶんないだ

い。どれをとつてもあまりに重い過去の遺産を背負つてゐるためです。この遺産が文明であり、これがないと彼らのアイデンティティはない。しかし、この遺産のために動きがとれなくなつてゐる。

彼らが政治的に統一をするということには考えられない。宗教的に統一をするということも考えられない。だとしたら、旧大陸の中に国家として分立し、別々の国家になるしかない。手を結ぶことは不可能だ。そしてたまに戦争をする。

新大陸の作戦としては、新大陸は放っておけばどんどん豊かになるので、旧大陸と距離をとり、宗教的には自由であるということ掲げて、等距離外交をする。「アメリカの孤立主義」が、その典型である。

アメリカにとつて最も困ることは、旧大陸が団結すること、そして、旧大陸が壊滅的な戦争をすることだ。世界の他の部分に比べて相対的に恵まれてゐること

ろう。

ロシアや中国やインドになるとかなり微妙で、アメリカのヘゲモニーを認めてゐると、自分の本来の潜在的な力量を政治的にも発揮することができない。だから、アメリカの覇権に対して共同して挑戦しようという動機がずっとある。

それから、油田地帯。資源はあるけど技術や資本がない。軍事力も政治力もない。このような国々は非常にラディカルな反米主義を生み出す可能性がある。また、アフリカや中南米のように何も無い国々は、合理的に考えるならアメリカと協力する以外に発展する道はない。しかし、心情的に考えるならば、「自分たちの惨めな状態は、すべてを奪つたアメリカのせいである」と感じる人々が政治的な国家を超えて連帯し、アメリカに反対するという運動にひきつけられる可能性がある。政治的国家で解決できない人類規模の連帯を与えるのは、定義上、宗教

をアメリカの豊かさがあるので、アメリカしなくなつてしまつたら、アメリカは豊かであるかどうかが判然としなくなつてしまふ。そこでアメリカが十分強力になつた後は、旧大陸に干渉するということをする。

なぜアメリカがソ連に敵対したか。放置しておけば、ソ連が旧大陸全部を統合してしまうからだ。ヨーロッパとインドと中国を、また中近東を制圧したソ連はアメリカに対抗しうるし、アメリカよりも強いだろう。アメリカはこれを阻止しなければならぬ。これが冷戦です。もし地球と似たような別の惑星があつたとしても、たぶんアメリカのような国が生まれたと思ふ。

アメリカは、人間が相対的に少ない、一人あたりの資源が相対的に多い。これがアメリカの強さの秘密です。

そしてこういう国は、地球全体から見ると絶対的少数者なのだ。

ということになる。

マルクス主義は科学的だつた。科学的・合理的にアメリカに反対することはたぶんできない。それならば、非科学的・非合理的にアメリカに反対するしかない。

宗教とは非合理性を合理的な形で、また、自分に対して説明できる形で提供してくれるアイデアである。よつて、二十一世紀は宗教の時代になる可能性が極めて高い。

ハンチントン『文明の衝突』

ハンチントンは「文明の衝突」をとこなえたが、ハンチントンはどこまで本気で「文明の衝突」を理解したのかはよくわからない。普通言われているハンチントンの理論と、それに対する私の反論はこうだ。

アメリカは孤立主義をとつていた後、

日本の真珠湾攻撃などによって目覚め、孤立してただけでは自国を守ることが難しいことに気がついた。そこで旧世界に適切に干渉しながら自国の国益を追求するという考え方に転換した。これが冷戦だ。冷戦というのは潜在的な戦争なので、アメリカの内部に大きな軍事力と、その軍事と結びついた産業や政治家のグループやロビーを作り出す。しかし、冷戦が解消するとアメリカに挑戦する直接の敵はなくなる。ただし、旧世界に干渉し続け、潜在的な敵対者に対する備えは怠らないという状態を維持する必要はある。もし丸腰になれば、旧世界の中の少数グループがアメリカに挑戦して勝ってしまうからだ。だから核も、巨大な軍事力も手放せない。

ただ、アメリカの中にも平和勢力がある。アメリカは競争社会なので、食うや食わずの貧乏な人も山のように存在する。その人たちに手を差し伸べて社会保

思想、あるいはネオ・ナショナリズムなど、いろいろなものが起こる可能性はある。

高度科学技術産業文明は、ヒト・モノ・情報が速やかに行き交うので、均質化が進み、地球上のあらゆる場所にいる人びとが、ほぼ同じようなことを考えて活動するようになる。しかし、均質化は急速には進まないで、過渡的に大きな

障政策をしようという人たちがいる。それならば、冷戦でいらなくなった軍備を縮小すればそういう社会福祉政策ができるのではないか、という民主党のような人が出てくる。しかし、それをやってみるとアメリカの優位はなくなり、ならず者国家が出てきた時に対処できなくなってしまう。

ところで「新しい敵を見つけなければならぬ」という不断の力学がある。これは、アメリカの深層心理だ。そうすると、キリスト教にとってのイスラム、非キリスト教としての中国、将来のインド、あるいはかつての日本……と常に仮想敵を生み出していかないといけない。

ハンチントンには、思いつきで「チャイナ・イスラムコネクション」などと言い、「アジアとイスラムが結びついてアメリカに対する陰謀を企てるのではないか」と示唆した。

私は、このハンチントンの理論は図柄

ギャップが生まれる。コストがかからない情報が特に伝わりやすく、モノはある程度伝わり、ヒトは一番移動しにくい。

これを第三世界の視点から考えてみよう。

貧乏な国にずっと住んでいて、とうぶんと先進国に働きに行くあてもない。物質的にはコココーラやホットドッグなど、いろいろなものが手に入るが、革命的に豊かになるほどではない。そして先進国の豊かな生活は、メディアやインターネットを通じて、手に取るようにわかる。

こうなると、大きなフラストレーションが生まれる。もし情報がなければ何の問題もないはずなのに、情報があるお

としては大きすぎると感じるし、そのような実態はないと思う。しかし、ハンチントンの理論は人びとの深層心理に働きかけ、アメリカで大ウケした。そしてみんなが信じればそれは現実的な力になるので、無視できない考え方になってしまった。

だから、ハンチントンの主張が文字通り正しいとは、私は思わない。それほどたいした洞察力でもないし、たいした業績でもない。ただ、潜在的な矛盾を言い当てたハンチントンの理論がタイムリーなものであったということは言える。

SARS化した

宗教が引き起こす社会変動

今後、宗教の関わりの中で、大きな社会変動は起こりうるのか。

イスラムなら原理主義、日本なら民族派右翼や尊皇攘夷思想、中国なら毛沢東

かげで欲望を強く刺激されてしまう。

このフラストレーションに対しては、政治的国家的回路を通じて政治的・外交的・軍事的に解決するか、宗教的回路を通じて解決するかという、二つの方法がある。

最初はもちろん、政治的・軍事的に解決しようという動きになり、ナショナリズムが生まれる。グローバリゼーションに対して、自分たちの固有文化は何を核にしているのかを考えるのだ。

これは「国づくり」ということだが、国づくりはアメリカの協力がなければできない。日本のようにアメリカに意地悪されると、たちまち「ならず者国家」に変貌して、対米戦争になってしまう。日本の心情ナショナリズムは、実力で適いっこない兄に喧嘩を挑む弟のような状態で、「手加減をしてくれるだろう」という甘えから戦争をおこしたのだろうが、対米戦争をすれば壊滅的な戦争になるの



湾岸戦争から9・11とハンチントンの主張はあまりにタイムリーであったと言える。

で、普通の国はこのような馬鹿な戦争はしない。

しかし、今、北朝鮮のように、かつての日本を小さくした「ミニならず者国家」がたくさん存在している。

ナシヨナリズムを政治的・軍事的に解決しようとするれば、展望のない争いになり、孤立の道を進むことになる。これを処理する方法は、兵器などいろいろある。百万人、一千万人単位の犠牲が出ることを厭わなければ、必ず退治できる。だからこれは、アメリカを本当に脅かすほどのものにはならない。

もうひとつの方法は、「政治的国家が存在すること自体が間違いだ」と思うことだ。アメリカが存在することが間違いだし、国境があるのも間違いだし、私たちが自分の国にいなければならないことが間違いである、という思想になる。

これはナシヨナリズムにはならない。むしろ、「国境を越えた大きな共同体の

教とイスラム教のいいとこ取りをしたようなハイブリッド宗教が起った時が最も大変だろう。

その新しい普遍思想の広がり方は、隣接地域に少しずつ広がるような古典的な拡大ではないだろう。グローバリゼーションの波に乗って瞬時に広まっていくものだ。自分たちのニーズに合っていて、自分たちに希望や実益を与えると人びとが思えば、ワッと広まっていくものである。伝統的なローカルなある宗教がそのまま、グローバライゼーションにチャレンジするというものではない。その結果生まれた変種、古典宗教のフレージャーを持つているSARS化した新種の宗教が一番危ない。

ビンラディンはムスリムに訴えているが、宗教的なカリスマや創造性があまりなかったのよかった。ただの陰謀家で、テロリストのリーダーでしかなかった。そうではなく、自己犠牲を厭わない、自

一員である私たち」という思想になり、「アメリカ人も私たちも同じ兄弟だ」という主張になる。兄弟に会いに行くという理由で、難民がボートに乗って大量に押し寄せてくるということが考えられる。アメリカから見れば、これは不法な越境行為だが、「何で仲間を撃ち殺すのだ。俺たちは兄弟じゃないか」と聞き直して、「ラブ」とか「ピース」とか言いながら押し付けてくる。これは戦争よりも怖い。

アメリカの優位を覆すような規模でこれが起こるならば、とても厄介な問題だ。これを政治的国家の範囲で受け止めようと思うと、人口の少ない州をアフリカや中国にあげるというように、新大陸と旧大陸を混然一体とするという考え方でしか調整ができない。すべては新大陸と旧大陸の不公平が原因なので、人が移動して新大陸と旧大陸が均一になるならば、もはやそういう動きが起きなくなる。

分の利害関心も無い、アメリカへの憎しみもない新種の宗教が生まれたときが、実は危険なのだ。「こういう厳しい状況では、仏教もヒンドゥーもイスラムもキリスト教もアメリカもアフリカもない。こんなものにこだわっているから、私たちは幸せから遠いのだ」という主張が、大きなパワーになる。

パワーを持った宗教が広まるときは、必ず感染力が高まってSARS化している。キリスト教もそうだった。それほどれくらい恐ろしいかというと、ユダヤ教が少しSARS化しただけでキリスト教になり、何億人に広がったかを考えればわかる。イスラム教も同様である。

宗教が爆発的に広まるのは、時代が突破しなければいけないが突破できない壁があり、人びとがその手前でじっとしてフラストレーションをためこんでいたという状況があった。今後、そうした状況を見通した上で、

しかし、この均衡状態は、政治的国家としてのアメリカの消滅を意味する。新大陸の優位が消滅するのだ。でもこれは、配分の正義にかなっているもので、宗教的にこれを主張する普遍思想がでてくる可能性が潜在的にある。

では、イスラム教に、この普遍思想としての可能性はあるのか。ある意味でその資格はある。イスラムは人類最大の宗教共同体を構成している、政治的国家が個別に存在するのは正しくないという考え方をもち、資源は平等に配分、再配分されなくてはいけない、という思想があるからだ。

しかし、イスラム教がすぐに普遍思想になるとは思わない。イスラムが普遍思想になろうとしても、例えばヒンデュー教もキリスト教も中国も日本も巻き込むことができない。これまでの宗教対立や文明をひきずり過ぎているからだ。イスラム教よりも、むしろヒンデュー教と儒

「今までの知識をこう組み換えたらならば、ユダヤ教信者もイスラム教信者もキリスト教信者もすんなりコンバートできる」と考える指導者がでてくるかもしれない。現代の政治的状况を十分に洞察していて、科学技術にも非常に知識があって、ガンジーのような雰囲気を持っている指導者が第三世界から出てきて、献身的に活動していたにもかかわらず暗殺されたりすれば、その新種の宗教のパワーはあなどれない。

宗教を喪失させた日本の国家形成

日本人の自我形成への影響は、宗教よりも国家のほうが大きかった。これは明治のことを考えればわかる。

明治以前には「家」があり、「藩」すなわち「郷土」というものがあった。それから「日本国」というものもあって、「天皇」や「将軍」というものがあった。

このどれを自分のアイデンティティの核にするのが問題だった。

伝統的にはまず、家を自分のアイデンティティの核にしていた。家は秩序づけられていて、国(藩)にまともり、大名(君主)がいて、このなかで収まる。日本国や天皇というのはいわば付けたり。これが幕藩体制だ。

朱子学がここを組み換えた。朱子学では「孔子・孟子の相対化」が重要だ。形而上学を持ち、天という考え方があり、それらしい原理で宇宙を説明してしまふ。そして、聖人を、天の理が現象したものだと考える。孔子や孟子もそのような天理の現れであり、天理の現れという点では知識人である自分と同じだと考える。もともとの儒教は「孔子、孟子がこう言ったから正しい」というものだった。朱子学では天理が正しいので、孔子も孟子も間違えることがあり得るということになる。朱子学の原理によって、孔子や

孟子も批判できる。孔子や孟子がある状況で判断したことは、別な状況だからという理由でひっくり返せる。状況に対応して正しい判断をするのは私である、となる。

このアイディアを日本に置き換えるならば、天理は天皇で、天皇が正しい。そして、天皇と交流できる知識人である私は、自動的に正しいことを成し遂げる。そのためには、まず、家のアイデンティティを捨ててもよい。家が組み合わさってできている藩という秩序から飛び出してもよい。むしろ、それは正しいことである。

だからみんな脱藩したのだ。そしてただの一個人、草莽の志士となり、天皇の意図のもとに動くようになった。これが相談しあってグループを形成し、將軍を打ち倒そうという行動に出る。この「尊皇攘夷」というものは、朱子学がSARS化したものだ。

このように形成された自我は、まず欧米列強の圧力を受けているという状況で、ナショナリズムのために自己を捨てて献身しなければいけない。そして国を守り、民族を守り、郷土を守り、家族を守り……すべてを守り、そのためには自分を犠牲にしてもいいと覚悟する。これが日本の近代的人格の原点である。

では宗教はどこにあるのか。

朱子学のモラルは宗教的に見えるが、実は政治学である。政治的国家を構成することのほうがはるかに重要なのだ。

明治維新が成功した後、日本という国家は、神聖国家であり、かつ世俗国家であるという非常に奇妙なものになった。

日本が政治的国家であることには違いがない。軍事力を持ち、外交権を持ち、税金を集め、文部省などの行政機構は全部ある。しかし、その天皇が祭司を行ない、神道の元締めでもある。そして、こ

の神道は、グローバルイゼーションに洗われた後にできた新しい神道である。江戸時代までの神道は仏教と貼り付いていたが、それを分離させ、「仏教は宗教であるけれども、神道は宗教ではない」と宣言した。政府から言わせればこれは「世俗国家であるが、内実は宗教国家である」ということだ。そして政府が言うところの「宗教」は、仏教やキリスト教というかたちで、家庭や個人のものとなった。同時に、それとは無関係に「個人は国家をアイデンティティの核として国に献身しなさい」というイデオロギーが成立した。こうして一九四五年までできてしまった。

このような過程で日本という国家はその宗教性を失い、国家は今度こそ世俗化し、天皇は象徴となって忠誠の対象にならなくなった。

では、国家は忠誠の対象になるのか。

ここで天皇の位置に座ったのが、超法

規的存在とも言うべきアメリカだ。これが日本人の戦後の原体験になっている。しかし、アメリカは外国なので、アメリカに献身する草莽の志士は出て来られない。この、天皇とアメリカの関係によって、明治以来の日本人のモラルは根本的に破壊された。

そうすると、例えば、食べ物を食べておいしいという感覚や、生きていかなきゃいけない飢えなどのような、プライベートな自己、自分の生活実感を根拠にするしかない。これが戦後日本の自我形成の原点となった。

それでも公共的なもの、自分の私利私欲を抑制しても実現しなくちゃならない何ものかがあることはある。自衛官だって警察官だって、自分を犠牲にしながら職務を遂行しているし、公共的なものは存在している。しかし、それに言葉と形を与えることができないし、制度を作ることもできない。これが問題だ。

自我形成の過程で、不完全燃焼というか未解決というか、ミッシングリンクのようなものをずっと抱え込んでいるというのが、日本の戦後である。

このミッシングリンクがたまに与えられることもある。それはマルクス主義かもしれないし、新興宗教かもしれないし、オウム真理教かもしれない。

しかし、それはかなり危険だとみんな思っている。なぜかと言うと、ミッシングリンクが与えられた途端に転倒してしまい、日本の政治的国家と敵対することになるからだ。

では、日本の政治的国家に対して忠誠を示す方法があるかというところ、リングが欠如しているので忠誠を示せない。だから本当は、右翼やナショナリストというものも存在できない。それでも、日本人は、日本国の存在を全く疑っていないのである。

「じんじん」に従事する 信念なき知識人

最近「日本のネオコン」に注目が集まり、日本の伝統と結びついた神道のお祭など、日本人の無意識下にある宗教性を再確認していかうという動きがあるという。

しかし、私から言わせれば、それは「じんじん」にすぎない。

靖国神社の問題を考えてみよう。靖国神社に祀られている側の人びとは、国家に対する忠誠を自我の中核としなければならぬ時代の戦争で亡くなった人びとだ。ところが、奉る側の残された人達は、戦争を経験していないので、忠誠の核はない。ないから、本当はそこに参拝できないはずだ。それでも参拝するとすると、「自分には忠誠の核があります」というふりをするしかない。これは「じんじん」の世界でしかなく、アナクロの右翼のよ

うに見えてしまう。昔はそれは恥ずかしいことだったが、だんだん世の中が変わり、これがカッコイイことになってきたのだ。ニュートラルの批評家として活躍しておられる方の対談などを見ると、「誰も言わないからわざと核武装のことを言いますよ」とか、「もう左翼はカッコ悪いから私は右翼にしました」とか、「なんちゃって右翼」とでもいうような発言がある。昔流の信念の核があったらそうはならないだろう。「信念の核はないが、今は状況的にこのように他者から見えたほうがいいと思うので、自分はこのような確信的に行動しています」ということなのだから。

これは転向とは違う。最初から何もないので。「自分の信念を状況によってねじまげる」というのが転向だが、「他者から見られた時に、どういう信念を持つている人間と見られたら自分は満足できるだろうか」ということで信念を

選ぶことは、本来の信念ではないいま流

行っている「反米」や「親米」や「プチ保守」などは、いわば「じんじん」みたいなものだと思う。また、それを宗教に対する関係というようには表現せずに、政治的国家に対する関係として表現している。だから、自衛隊のイラク派遣の問題など、国家のふるまいに関して、あたかも信念があるかのように発言する人が多いが、実は、考えていくと特に理屈なんかない。そこが衰弱だと思っ

歴史的に見た場合、明治期はまだまともだったが、すぐにおかしくなってしまった。

体制が明らかに変な方向に向かっている場合、明治維新のように自分なりの信念をもって動かなければ、取り戻せない。しかし、今は、体制は明らかに漂流しているが、ほとんど間違った方向に向かっているわけではない。だから、これに反対するのはすごく難しい。

いま一番大事なことは、反対するより

以前に、しっかりしたビジョンをつくりだして、国家を引っ張って行くというエネルギーだ。単純に反対している場合ではないし、日本という政治的国家は、反対するほど大したものではない。

今の知識人は、ポーカーの手がないのにあたかもストレート・フラッシュになっているかのような札を出していつて、どれだけ右翼らしく見えるか、というようなゲームをやっている。何を言っても殺されないし、責任もとらなくていいという雰囲気があるからだろう。どうすればマスコミ受けするかということを考えて発言しているのだとすれば、それは本来の信念とは関係がない。この程度の覚悟の知識人が付和雷同的に増えている日本は大変まずい状況にあると思う。しかし、それ以前に、このような「じんじん」に従事する人びとは、知識人としての条件を満たしていないと言ったほうがいい

かもしれない。

オウム真理教事件について言えば、あるとき日本の宗教学者は「あれは正しい宗教ではない」という批判をしなかった。なぜそうなるかと言うと、宗教が政治的国家に隷属しているからだ。

国家と宗教の緊張関係があれば、国家は暴力装置なので、宗教に立脚する者は常に命の危険を覚悟しなければいけない。しかし、日本の場合、国家に生命を保障されながらも「言論については適当にやるように」という約束（八百長）で成り立っている。仏教も千年以上もそれに骨がらみになっていたので、オウム真理教が出てきたくらいで、命を賭けて「あれは宗教じゃない」と批判する習慣がない。先の大戦のときだろうがなんだろうが、折節に何も批判的発言をしていない。

宗教とは、言葉や信念で、国家とは違った秩序をつくりあげることだ。それを

突き詰めていけば、国家と無関係なはずだし、それを超越していく場所に出るはずだ。国家とはかりそのものであり、「日本人」という概念も政治的国家で決められたことにすぎない。遺伝子から考えてみても「日本人」というものは存在しないのだから、日本人だと思ふ必要は全然ないはず。宗教はそう考えるための力を持つている。

日本人が「個」を確立するために

宗教を論ずることが苦手な日本人の問題を、国家がなんとかしなければいけないと考えるべきではない。これまで国家は、宗教をさんざん馬鹿にして、コントロールして、そして宗教的に人格を形成するという独立した知識人を許容してこなかったために、このような状況に行き着いてしまったからだ。

だから、戦争に一回負けてアメリカに占領されただけでガタガタになるといのは本来はおかしい。日本において、儒教などは、政治的に負けっぱなしだ。

中国の場合で言えば、戦争に負けたらどうするかを考える術が朱子学であった。モンゴルにやられても、原理主義的に頑張っている。中国はモンゴルに負けて百何十年も占領されていた。しかし、日本はアメリカに負けてたった六年間占領されただけでこんなにガタガタになっってしまった。宗教をきちんと育てていなかったのが、国家がもたない。国家からすれば自業自得だ。

政治は状況論なので、言葉や法律も、政治的情勢に合わせて解釈が変わっていく。そして、その一貫性は問わない。「その時々で最善の合意をつくりだしてうまくいけばいいんだ」というのが政治だ。

宗教や哲学や思想はそうではなく、状

況とは独立して一貫する原理を求め、言葉の形で普遍の原理を定着させようとするものだ。だから政治と宗教、政治と哲学は緊張し、矛盾する。もちろん、両方もなければならぬものだが。

日本の場合、政治が強すぎて、哲学、思想、宗教を育てなかつた。そしてその結果、政治がダメになっている。

今の日本人は、このグローバルライゼーションの時代に、人類規模の共同体と、分立する政治的國家の矛盾と緊張があるということがわからない。「緊張があるんだってさ」とCNNを見たりしてるにすぎない。

このような精神状態が直るのは、例えば、北海道や東北が外国に占領された場合だ。そうすれば、同胞である日本人が、政治的國家としては二つの秩序に属すことになり、政治的國家と民族、アイデンティティは別ものだと考えることができる。

こうなると、文学と政治が完全に分離する。日本国は東京から南しかなくなつてしまい、北海道・東北文学と日本文学が別になる。その状況下で日本文学について考えようとするれば、政治的に主流である日本文学のほかに、北海道文学や東北文学が存在することになる。

戦前はこの状況に近いものがあり、台湾文学や満州文学などがあつた。その時は、日本を「大日本」という大きい概念で考えたり、「本土」という小さい概念で考えたりしていた。このような思考訓練を、台湾は一九八五年から、朝鮮は一九一〇年から一九四五年までの半世紀のあいだずっとやって来たのだが、現在の日本人はそれを忘れてしまった。

江戸時代は、二重権力状態だつた。將軍は外交権を持っていないはずなのに、条約を結んでしまった。それに対する反発が、倒幕運動のきっかけとなった。対馬も薩摩も外交権を持っていて、戦争も

するといふ多元的な状態だつた。

明治時代に政治的國家を宗教化して強めたので、もともと弱かつた宗教の力がすつかりなくなつてしまった。

今後のことを考えれば、沖縄などはもとと王国だつたのだから独立してもよい。また、軍事・外交は集中させるのが通常だが、完全に分権化して、場合によっては外交権くらい分けてもよい。「特区」ぐらいの分離では生ぬるい。

このように「文化的な日本」と「政治的國家としての日本」を、分けておくのがいいのではないか。これが宗教について真摯に向き合うためのひとつの出発点になるだろう。

場合によれば、日本が外国のどこかを買い取つたり、北海道とどこかを交換したりしてもよい。世界大移民の時代なのだから、先進国に行きたいという外国人がいたら、過疎で苦しんでいる東北地域などをアフリカに譲り、そのかわりに元

気のよい日本の若者がアフリカに行つて自分たちの國を作るなど、そういう大胆な発想が必要だ。

日本人が国際的な状況で、適切に判断して行動することができるようになるためには租界もいいたろう。例えば、空地になつている日本の湾岸地帯を外国人のための租界にして、鉄条網で囲い、外国の公館を建て、学校を建て、日本とは異なるシステムで運営してもらおう。そして、租界の方が行政サービスがよければ、「他の地域はいったい何をしているのか」と日本人から文句が出てくる。目に見えるような形で違う人たちがいるという、ザラザラ感をつくつておくのがいい。似たようなものに米軍基地があるが、これ

はいろいろな経緯から対等の関係ではないのでよくない。治外法権で租界をつくるのがよいだろう。

最初のレッスンとしては分住というのがベストだ。そこでよく練習してから、

混住に移行する。最初から完全に混住すると差別や迫害が生まれる可能性もあるので、最初に新移民の自治権や自主権を認めなければいけない。

その上でやはり、日本人はこの列島の中だけに固まって住んでいてはいけない。もつと世界へ出ていくべきだ。そして、世界中の人びとも日本にやつてくる。そうなれば「日本人のアイデンティティとは何だろうか?」「政治的國家と切り離された日本人というのは何だろうか?」と、この場所を離れて考えることができる。ここで初めて「個人」というものが確立していくのだ。

橋爪大三郎 1948年神奈川県生まれ。東京工業大学大学院社会理工学研究科教授。社会学者。主な著書に「はじめての構造主義」(講談社)「現代思想はいま何を考えればいいのか」(勁草書房)「世界がわかる宗教社会学入門」(筑摩書房)「言語派社会学の原理」(洋泉社)などがある。